

7 令和7年度SSH運営指導委員会

■ 令和7年度 第1回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和7年7月2日(木) 14:00 ~ 16:00

2 実施場所 本校 会議室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海地域環境教育研究センター特命教授 委員長 (リモート)
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長
西岡 加名恵 京都大学大学院教授 (リモート)
会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授 欠席
山中 亮一 徳島大学環境防災研究センター 准教授
浦川 豪 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授
【管理機関】野間 良重 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事
【本校】校長 山根 尚 教頭 藤原 守人 三浦 裕子
主幹教諭 難波 滋 福本 稔 四郎園 千華子
教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 溝口由輝 福田秀志 谷 良夫 浅井尚輝
西村寅壮 村上一寿 富田優次 北方英二 木村恭子 佐々木智之
実習助手 石崎陽子 瀧口貴久 小川 章

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本校のSSHの取組(現状)について

校長：5期に向けての助言をもらいたい/探究の核となっている高校生サミットを国際エメックスセンターと一緒にやっていけないかと考えている/5期目への助言と、自走のための連携先について助言をもらいたい

委員ら・指導主事：兵庫県の教育方針にとっても、SSH指定校は中心となることを期待している。

教諭：中間報告の時に指摘された「普及」のためにマニュアルを作った/公開授業週間で探究を軸として実施した/SR科の活動を地域に根差したものにしていきたい/台湾研修を含めて、海外との連携を積極的に推進していきたい/SR科の探究テーマによってはゴールに困っているものもある/看護類型として、災害関連死を解決していきたいと思っているが、難しい部分も多く題材が無い/スポーツ健康類型の生徒は個人探究をしている/重点枠では昨年度科学技術から離れた部分もあるので、今年はつなげたい/3期ではうまくいかない部分もあったが、重点枠は類型の防災とつなげていけないかと考えている

2) 今後のSSH活動について指導助言

教諭：4期までと対比させながら5期の申請に向けて準備をしている/尼小田探究プログラムとして、全科類型で、テーマの近接する領域で共創させたい/国際的な探究もしたい/探究科目の充実だけでなく、各科目の中での探究や各科目を深める探究をしたい/育成した課題研究力をどのように地域に活かすか、人文・社会科学領域の生徒に科学技術をどう入れていくかが課題

委員ら：新規テーマによる探究は、生徒の意欲が高そうでよい。一方で何年か前から続いているテーマは過去の成果の上に立ってほしい。/探究マニュアルを「使って欲しい」と言われていたはずなので、早く出して、他校なり校内なりで使用してブラッシュアップした方がよい/同じ課題やテーマであっても地域差のある課題をプログラムとして課題研究をしてもらえたら良いのでは/普通科や健康類型であっても客観的な論理力が大切だと思う/シェアドリーダーシップの小田高での定義や、総合知の小田高での具体化が必要/「コンピテンシーベース」という言葉も、小田高での解釈を言えたらよい/非認知能力を育成できた、と言えれば成果と言えるのではないか/探究マニュアルがホームページにあるのはよい/地域課題解決に取り組んでいるのが、小田高の良いところ。高齢化等とその地域課題が、日本の全国で同じ点で、汎用性をアピールできないか/まだ日本では注目されていないが、価値ある探究テーマや教材を提案してはどうか/生徒の内面が成長したかどうかはわかりにくいので、先生から見た客観指標が必要/学科、類型、生徒、先生の個々のことについて学校としての方針があればよい/小田高としての総合知をどう定義していくか/次期の申請に向けてはネイチャーポジティブの観点があってもよいかも/ワンヘルスも防災と関連があるかも

教諭：小田高版の総合知、シェアドリーダーシップの測り方が難しい。どうしたらよいか。

委員ら：目指すコンピテンシーを細分化して尺度を作るのは難しい。大学の力を借りた方がよい/保護者から見た子どもの行動変容を見ていけるとよいのでは

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

尼崎小田の強みをいかして欲しい/本日の会議で出た話を基に、概念図を作って出してほしい。

■ 令和7年度 第2回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和7年1月31日(木) 15:45 ~ 16:35

2 実施場所 本校 会議室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海環境教育研究センター特命教授 委員長
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長
西岡 加名恵 京都大学大学院教授
会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授
山中 亮一 徳島大学環境防災研究センター 准教授 欠席
浦川 豪 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授 欠席
【管理機関】野間 良重 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事
【本校】校長 山根 尚 教頭 藤原 守人 三浦 裕子
主幹教諭 難波 滋 福本 稔 四郎園 千華子
教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 溝口由輝 福田秀志 谷 良夫
北方英二 木村恭子 佐々木智之
実習助手 石崎陽子 瀧口貴

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本日の研究発表会について

委員ら：個人の興味のある課題の探究が多いが、まず相手に理解してもらう必要があることをさらに意識してほしい。/社会課題と自分の関心をクロスさせる研究課題が多く、純粋な興味に基づくものが減ったようにも思えた。/フィールドで気づいたこと等に基づく発表が多く、指導の成果かと思う。/SR科も普通科とフィールドに行き、身近な課題発見に繋げても良い。/探究の最初の段階で生徒に質問リストを教える、弁証法的な思考法やレポートを組み込み、想定される批判を考えさせる等の指導をしても良い。/SR科の発表で、設定した課題と実験が合っていないものがあった。行ったことに対して、ストーリーを後で設定して良い。ただし、最初の実験の設計や最後のまとめ方は教員が指導すべき。/他学科の発表で仮説という語句がでてきたが、無理に型にはめなくても良い。/台湾海外研修の交流の仕方は？

教員、校長：環境と防災にテーマを絞り、その探究活動をお互いに行った。事前にオンラインでディスカッションし、研修旅行でワークショップを行った。高校生サミットの生徒実行委員会と同じ手法を海外で取り入れた事例となった。

教員：例年は別日の普通科全体のポスター発表を今年度は本日実施したが、どうであったか。

委員ら：きちんとやる意思が伝わり、コミュニケーションもできていた。/会場は声が聞こえにくかった。/学科を超えて交流できることは、小田高のユニークな点である。地域課題をいかに吸い上げ、また、国際的にいかにコミュニケーションするかを問うような、課題解決のためのコミュニケーション力の育成につながる。レポート提出など、異分野の発表を聴き、理解するように促す工夫があると良い。/次期の流れの中で、高校生サミットの方法論を具体的に書くと良い。/地場の中小企業が多い尼崎の地域で役に立つ探究力を持った人材を小田高は育成するという話を以前聞いたが、現在ある意味で実現している。/地域に根差しながら社会で問題解決に取り組む人材を育てている点をアピールしてほしい。/ポスター発表では、社会科学的な研究的な知見を位置づけ、この本を読むと面白いなど勧められると良い。また、探究の中で学校だから理想を掲げるのではなく、現実的な意見を伝えても良いと思う。/申請書では、具体的な生徒の姿を語ると説得力が増す。SR科の生徒が「社会的な変化を科学的に検証したのか」という趣旨の質問を他学科にしていた。違う発想からの質問がある点が、小田高のシェアードリーダースHIPの事例である。

(2) 次期申請について指導助言

委員ら：あまおだ型探究プログラムについて、あまおだ型とはどのような特徴か具体的に書いたほうがアピールになる。例えば、高校生サミットでやっていること、全部生徒がやって本校で閉じない、「瀬戸内海」のような1つの固有のテーマがある、また、地域課題に取り組む人とグローバルなことに興味を持つ人が1つの高校の中で交流できて、かつ全国の高校とのネットワークの中で交流でき、それを高校生がオーガナイズできる力を育てているなど。その点をわかりやすく示し、他所でも同じモデルになり得るということを示せば良い。総合知やシェアードリーダースHIPもそこにつながると思う。/社会課題と自分自身の問いが結びついて、あれだけの生徒の育ちが見えるという点がうまく伝わると良い。

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

今日の発表ではIV期の成果が全校へと普及していることが見えた。探究活動が深まっていると思う。先導I期では探究活動の取組を、あまおだ型探究プログラムと再定義して申請している。